

## 春日和男編 『春日政治著作集』

迫野， 虔徳  
九州大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11988>

---

出版情報：語文研究. 61, pp.62-64, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

《紹介》

春日和男編『春日政治著作集』

迫野虔徳

春日和男先生の手によってすすめられてきた、御尊父春日政治博士の著作集全八巻、別巻一の刊行がこのほど完結した。

春日政治博士には、大著『西大本金光明最勝王經古點の国語学的研究』をはじめ、『古訓點の研究』『国語叢考』『萬葉片々』その他、単行本のかたちではやくまとめられたものがあるが、今日、それらが多くがすでに入手困難な状態にあり、また、政治博士御自身が生前、単行本としてまとめるつもりで用意されながら果されなかつたもの、あるいは、雑誌論文等、四散して閲覧がかならずしも容易でないものなどもあり、著作集として、今回、これらが一堂にあつめられ出版されたことは、学界のために、まことにありがたいことといわなければならない。

春日政治博士の特に古訓點の研究に果された偉大な貢献等については、ここであらためて述べるまでもないことである。かなづかい、仮名字体調査のために、古訓點資料の研究に先鞭をつけた大矢透のあとをうけて、これをはじめ体系的な学問研究の対象にすえ、斯学のその後の発展の基礎を築いたことは、周知のとおりである。古

訓點研究のその後の進展はめざましいものがあるが、この草創期にあつて、広い視野と著実な実証的研究にうらうちされてものされた諸業績は、今日においても、いささかもいるあせるところがないといつてよい。このたびの著作集によって、博士の学問の全体をあらためて考え直してみるよい機会が与えられたといつてよいであろう。

著作集の構成は、次のとおりである。

- 1 仮名發達史の研究
  - 2 国語文体發達史序説
  - 3 国語叢考
  - 4 統国語叢考
  - 5 萬葉片々
  - 6 古訓點の研究
  - 7 国文法教育
  - 8 隨筆青鸞集
- 別巻 西大本金光明最勝王經古點の国語学的研究  
巻3・5・6・8および別巻は、旧刊の書名をそのまま襲い、編

二者の考えで関連する論考二、三を今回あらたに付け加えている。その他の諸巻は、政治博士に計画のあったものはそれに従い、それ以外のものは、類によってわかつて、新しい書名を与えて、右のように、全八巻の著作集としてまとめたものである。

それぞれ巻ごとに、訓点研究その他を通じて、政治博士につらなる方々の「序文」がおかれ、巻末には、編者の詳細な「解説」がある。それらによって、政治博士の人となり、諸業績の歴史的・今日の意味が了解できるようになっている。

巻1『仮名発達史の研究』には、「仮名発達史序説」(岩波講座日本文学 昭8)、「片仮名の研究」(国語科学講座 昭9)「仮名の沿革」(朝日国語文化講座 昭16)「文字及び文体より見たる国文学」(文部省主催講習会講演要綱 昭9)の4編をおさめるが、「解説」にあるように、これは、そのまま著作集第2巻『国語文体発達史序説』につながるようである。博士の仮名研究は、大矢透のような仮名字体や仮名遣、音韻とのかかわりといったものより、どちらかといえば、仮名の発生や展開の意味を問うことに関心があるように見受けられる。仮名なるものの発生、およびその発達は、日本語を直接、自由に書きあらわす文章様式の創出、新しい文体の創造という風に考える。もともと外国語(中国語)のためではない漢文から、醇な国語文がどのようにして成立し、発展していったかを仮名の発達と共に、それと相即的に把えてみようとするところにその主たる関心があったようで、それは、そのまま、第2巻『国語文体発達史序説』のテーマに連繫している。

第2巻は、「解説」によると、昭和21年、福岡の惇信堂というところから出版される予定であったのが、終戦直後の混乱期で実現せ

ず、このたび、はじめて日の目を見ることになったものであるという。原題は、『より親たる仮名の発達 国語文体の成立』とのことであるが、その標題に著者の関心がどのあたりにあったかが十分うかがえるように思う。本書は昭和11年京都帝国大学に提出した学位論文の抜粋改稿になるものでもあるという。不運にも未刊のまま終っていた著作が、こうしてあらためて日の目を見ることができるといいうのも今回のような企画があったればこそである。

なお、博士には、仮名あるいは文体について、「上代文体の研究」「仮名小考」「片仮名交り文の起源について」「和漢の混淆」などのよく知られた論考が他にもあり、類をもって撰する方針を貫こうとすると、旧刊を一度解体してしまう必要がある。しかし、それもかえって不便な面があつたということで、旧刊の枠はそのままに、できるだけ関連のある論考は一所にあつめるという折衷的な編集方針をとられたようである。編集に最も苦労されたところであろう。

第3巻『国語叢考』第5巻『萬葉片々』第6巻『古訓点の研究』第8巻『青籟集』は、その既刊分にあたる。今回、あらたに付け加えた論考を示す次のようである。

第3巻『国語叢考』は、昭和22年既刊分のほかに、「鎌倉時代の武士詞」(鎌倉時代の研究 大正14)「桃山時代の口語について」(福岡国語漢文学会における講演速記録、昭和2)「国語史上の一画期——文禄伊曾保を中心とした語法——」(日本文学講座 昭3)の3篇を収める。第5巻『万葉片々』には、『毛無乃缶』の訓(万葉17、昭30)「取与呂布」(私考)(西南学院文学論集一、昭30)等、6篇の論考、第6巻『古訓点の研究』には、「石山本最勝王経古点より」(国語国文学第27巻11号 昭33)「東大寺の古経巻について」(葦葉復刊2号

昭49)の2篇の論考をあらたに付け加えた。第8巻は、博士が九州大学を退官するにあたり、岩波書店から出版した随筆『青蠹集』を表題にするが、その他に、童謡『月見草』(目黒書店、大正11)や博士詠作の短歌、俳句などをおさめる。博士の息吹きが直接聞えてくるような、もっとも人間くさい巻になっているが、中には、論考拾遺として、「宇治拾遺物語の一本より―世継物語私考―」(文学研究第9輯、昭9)のような學術論文も含まれている。この第8巻などは、既刊分に新たに関連あるものを付け加えたというより、まったく新しい編集になるといった方がよいのかも知れない。

第4巻『統国語叢考』は、博士の没後、机辺を整理していて、この表題の旧稿の一束がでてきたとのことである。今回、表題をそのままに、なお若干を加えて、都合12篇の論考を含むひと巻としたものである。第2巻『国語文体発達史序説』の場合に似て、今になってようやく博士の素志が表現することになったということである。論文は四部にわかれ、第一部は、「国語瑣談」「地名より観たる大和」など、奈良女子高等師範学校勤務時のもの、第二部は、「校訂法王帝説」「法球帝説樵考」「法王帝説統考」の3篇の法王帝説研究、第三部は、「小学方言講義」より、「源氏物語の俗訳本」「一八五〇年和訳の馬太伝」の、新たに九州の地で入手した文献の調査、研究、第四部は、「契沖の語学―仮名を中心として―」「国語の母音同化」の2篇で、これは、当初の博士の束の中には含まれていなかったものという。

著作集第7巻は、『尋常小学国語読本の語法研究』(修文社、大正7)、『中等日本文典』(新体中等国文法、大正12の改訂版、星野書店昭4)、『新体中学国文法教授資料』(星野書店、大正13)の3篇を

あわせて、今回新たに『国文法教育』という書名を与えたもの。博士の比較的初期の業績である。

このほかに、別巻として、大著『西大寺本、金光明最勝王經古点の国語学的研究』も復刊された。今回は博士の所蔵されていた密着印画を書庫からとり出して、旧版の写真ととりかえたとのこと。版形も旧版より拡大し、紙質、写真技術の進歩等によって、格段に判読しやすくなっている。巻末にそえられた「解説に代へて―斯道文庫報第十九、二十合併号より―」の各氏の惜しみない賛辞をみても、この書が世に出た直後からいかに絶賛されていたかということがよくわかる。

別巻の写真版のさしかえをはじめ、種々のいき届いた配慮によって、政治博士の諸業績は、また新しい息吹きをもってよみがえったように見える。著作集各巻のはじめには、豊富な図版が挿入されて、博士をしのぶよいすがたとなっているが、編集その他、随所にうかがえるように、博士のもっとも近い編者によって編まれたことによつてはじめて可能であったというところがすくなくない。本著作集8巻『青蠹集』を読み、この著作集編集のことに思いをいたすと、一種羨望に似た気持をおさええないものがある。(1、仮名発達史の研究、昭57・11 六、〇〇〇円、2、国語文体発達史序説、昭58・1、六、〇〇〇円、3、国語叢考、昭58・5、六、〇〇〇円、4、統国語叢考、昭59・6、七、五〇〇円、5、万葉片々、昭59・10、八、五〇〇円、6、古訓点の研究、昭59・2、九、八〇〇円、7、国文法教育、昭60・4、一二、〇〇〇円、8、青蠹集、昭60・12、一〇、〇〇〇円、別巻、西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究、昭、60・6、二〇、〇〇〇円 勉誠社刊)